

## ＜新校歌制定の思い出＞ 創立 60 周年記念誌より

元教諭 相川一男 様

私が昭和 21 年 3 月 31 日、本校に着任以来、昭和 31 年 10 月 1 日、都立神代高校へ転出するまで約 10 年間の思い出の中で、一番印象に残っているのは、やはり戦後のいろいろな混んとした中で、よくこの新校歌ができたと思うことです。

当時は戦後間もなくのことで、世の中の人々は食糧不足に悩まされ、その他の日常生活の物資の入手困難な時代で、空き教室の床に柔道場の畳を敷いて部屋を作り、住まわせてもらったものも私たちの仲間には何人かおりました。そんな時代を背景に、人々は日夜その日の糧をどう確保すべきかに汲々としておりました。

やがて山田文雄校長先生をお迎えしたころから、急に今の校歌(旧校歌)は立派ではあるが、歌詞も難解で曲も古く、時代にそぐわないから、現代風に若人の心に応えるようなものを作ったらどうかという声が内外から巻き起こり、それが次第に現実化してきたのでした。

最初は職員・生徒の中から作詞、作曲を募集し、何回か披露を試みましたが、結局満足したものは得られませんでした。そこで新校歌制定委員を選び、その道の有名な先生に委嘱するという事に決まりました。そして、大内福三郎先生と私がその任に当たりました。早速、大内先生と相談して、まず作詞から手掛けることにしたのです。そのころ、日本語の愛護と研究で、その道の権威であられた土岐善磨先生が日比谷図書館長をされていました。先生は早大教授で花壇でも哀果と称され、石川啄木友親交のあったことは皆さんご存じのことです。その先生に、当時、私の親友で早大教育学部教授で国文学者の川副国基君を通じて紹介状を書いてもらい、それを持って大内先生とともに日比谷図書館に訪ねました。本当のことを言うと多忙だから駄目だと断られるのではないかと内心びくびくしたものでした。しかし、先生は私たちの内意を聞くと、陰陽あふれるばかりの面差しで、にこやかな笑みさえ浮かべられ、快く承諾してくだ

さったので、これで第一段階は突破したと安心しました。

次に謝礼金の事ですが、先生には失礼とは思いましたが、学校のことで予算が十分になく、「作詞作曲を含めて 30 万円ほどしかありませんが」…と、恐縮しながら思い切ってお話ししたところ、「そんな心配いらないよ」とあっさり申されたので、またまた安堵したことでした。

その後、先生からの御要望もあって、ぜひ学校の環境を見たいとおっしゃられて、御来校になり、学校のたたずまいから、生徒の学校生活の様子をつぶさにご覧いただきました。それから一週間たたないうちに、原稿ができたからとのお電話をいただき、あまりにも早い出来に驚きと喜びの複雑な気持ちで受け取りに出かけました。目黒のご自宅だと記憶しています。その際先生から、作曲はどの他に依頼されるのかと聞かれました。実のところ当方としてはそこまでの準備ができていなかったもので、その旨を率直に申し上げましたところ先生は「それでは私の詩をいつも作曲してくれている信時潔先生ではどうでしょうか」とおっしゃられたので、当方では渡りに船というわけで、早速お願いし、紹介状を書いていただきました。

その紹介状を持参して、信時先生(東京音楽学校教授)のお宅を国分寺にお訪ねしてお願いしたところ、これもご快諾いただいたので、鬼の首でも取った用の心地で快哉(かいさい)を叫んだものでした。

まもなく曲も出来上がり、学校へ土岐先生をお招きして、その出来映えを聞いていただきました。こんな風にして、両先生の名コンビのお陰で、本校で一気呵(か)成(せい)に謳(うた)われている新校歌誕生となったのです。今では両先生ともご他界あそばされ、懐かしい思い出だけが私の胸の中に、今でも往来しています。